

土地の乾燥化と植林

木を植えれば土地の乾燥化が止まるという「植林神話」の問題点を考えるフォーラムが大阪・国立民族学博物館で開かれた。森林保全や生態学の専門家だけでなく、非営利組織（NPO）メンバーも出席し、意見を話し合った。

吉川賢・岡山大学教授（森林保全学）は中国、シリアなどの事例を挙げた。森林伐採や過剰な放牧が深刻な乾燥化、砂漠化を引き起こしている。ところが、植林事業はなかなか成功しない。むしろ植林で「木が水を吸い上げ、地下水位を下げる」ことがままあるという。

そこで降水量、蒸散量など地域全体の水収支をつかんだ上で無理のない植林をするとともに、生態系の復元力にも目を向けようと呼



乾燥化を防ぐための植林の限界や、これからの方策を話し合ったフォーラム（大阪・国立民族学博物館で）

大阪・民博で自然の回復力にも目を

ひかけた。

国際生態学センターの目黒伸一主任研究員は「どこに何を植えるかは、（崩れて見えなくなっている）潜在的な植生も復元してから決めなければ」といい、その方法を説明した。

モンゴルで植林事業に携わってきたパトジャーガル駐日全権特命大使も参加。「一本の木が黄金であるかのように」と、費用がかかることを嘆いた。その割に効果が少ないという。

「適切な森林利用、火災予防、害虫対策を進め、自然の更新力を後押しすることが重要」と、吉川教授らの考えに賛同した。

同会で農業支援などを行っているNPO「GNCC」の宮木いっぺいさんは「短期的にもうかる大規模農法が生態系を壊し、貧富の格差拡大が不法伐採を招く」と指摘。環境と調和しながら利益も得る「成功モデル」を示したいと話した。

中国・黄土高原で緑化に取り組む「緑の地球ネットワーク」の高見邦雄さんも「植えるだけが緑化ではない。貧困、環境破壊、砂漠化の悪循環を絶たなければ」と訴えた。

降雨と温暖な気候に恵まれた日本を基準にしているのは、乾燥化を止められない。この日の議論は、地域ごとの自然、社会条件に合わせた対策の必要を印象づけた。